

ブルグドエルファー著「白色民族は

滅亡するか？」(一)

Dr. Friedrich Burgdörfer, Direktor beim Statistischen Reichsamt, „Sterben die weissen Völker? Die Zukunft der weissen und farbigen Völker im Lichte der biologischen Statistik.“ Herausgegeben von der Deutschen Akademie 1934.

本 多 龍 雄

茲に紹介せんとする右の小冊子は獨逸統計局長ブルグドエルファー博士がナチス政權樹立の翌年、白色民族特にゲルマン系諸民族の民族的衰亡の危険を精細なる統計的資料を以て檢證し忠告する爲に出版されたナチス獨逸の啓蒙的著作で、單に獨逸のみならず廣く世界の識者の注意を喚起せるものである。聊か舊著には屬するが稍、詳細に互つて紹介する所以である。行論中現今とあるは一九三四年當時をいふものであることを注意され度い。尤もナチス治下の獨逸を除いては各國其の後の人口學的狀況はさして注目すべき變動を示してゐない。

一 前世紀に於ける世界人口増加の概勢

ブルグドエルファー著「白色民族は滅亡するか」(一)

著者ブルグドエルファーは冒頭先づ十九世紀に於ける未曾有の世界人口増加の事實に豫め讀者の注意を喚起してゐるが、其の概勢を見ると一八〇〇年に漸く六億を算した世界總人口は、一八三〇年には八億に、一八七〇年には十二億近くに、一九〇〇年には約十五億に増大し、そして現在は略、二十億に達すると考へられる。世界人口は前世紀中に二倍以上になつたわけ、一八〇〇年に對し現在は三倍以上となつてをり、更に之を一六五〇年即ち三十年戦争の終結後(推定約四億五六千萬)に較べると四倍以上となつたことになる。著者は常設國際統計局の報告その他資料に著者自身の種の推定を加へて此の前世紀世界人口増加の大陸別概勢を次の如き第一表として掲げてゐる。

第一表 一八〇〇—一九三二年間の世界人口増加

(a) 大陸別人口數(單位百萬)	
ヨーロッパ	一六〇 一八三〇 一八七〇 一九一〇 一九三二
アジア	一七二 二二〇 三〇六 四四七 四九八 四三七
アフリカ	三三〇 四五〇 六七〇 八五九 一二五*
アメリカ	七三 八二 一〇〇 一二七 一四六 五〇
オーストラリア	二二 三八 八五 一八〇 二五一 五八
計	五八七 八〇一 一二六四 一六二〇 二〇三〇 一五四
* この内支那を四七四(百萬)と推定	
(b) 大陸別人口増加(一八〇〇年—一〇〇)	
ヨーロッパ	一八〇〇 一八三〇 一八七〇 一九一〇 一九三二
アジア	一〇〇 一三四 一七八 二六〇 二九〇
アフリカ	一〇〇 一四一 二〇九 二六八 三五二
アメリカ	一〇〇 一一二 一三七 一七四 二〇〇

アメリカ	一〇〇	一八一	四〇五	八五七	一、一九五
オーストラリア (大洋洲)	一〇〇	一〇〇	三〇〇	七〇〇	一、〇〇〇
計	一〇〇	一三六	一九八	二七六	三四六

之によつてみると先づヨーロッパは一七五〇年(一〇(百萬))から一八三〇年までの間に約二倍となつたのに續いて、一八三〇年から一九三〇年までの間に再び倍加してをり、それに世界大戦による戦死及び出生減は三千五百萬を超えるると推定されてゐるばかりでなく、このヨーロッパは又過去數世紀間特に十九世紀中に莫大な人口を新大陸へ送り出してゐる(北米合衆國だけでも一八一九—一九三一年間に約三千八百萬、その内獨逸は約六百萬)。この大量移入民を獲た兩米大陸は一八三〇年以降百年間に六倍以上に増大した。世界人口の半數以上を占めてゐるアジアも二倍以上となり、アフリカも亦二倍近くになつてゐる。十九世紀に於けるこの澎湃たる人口増加の趨勢は爲めに世界的過剩人口の杞憂をさへ惹き起した位だが、現在も猶ほ一部の關心者を失はないこの種論議が本著者に極めて軽く扱はれてゐることは當然で、全大陸の人口収容力が八十億乃至百億と推定されてゐる現在、況んや今後に於ける農業その他一般技術の進歩を考慮に入れるなら殆んど論議の價値なき問題に過ぎぬと著者は考へてゐるようである。

この様な教壇的論議よりも著者が以て遙かに重大なる事柄として指摘するのは、外でもない、現在白色民族の當面してゐる顯著な出生減退の事實で、今世紀初頭以來特に西・中・北歐諸國や其他の西洋文化圏内に克明に看取されるこの事實が將來これら白色諸民族に及ぼすに相違ない世界史的變動を豫告し忠告することこそ聊、本著成立の所以でもあるわけである。

二 人種別世界人口の現状と其の動勢、特に白色及有色人種の生産力比較

於是、著者は先づ過去數世紀に於ける白色民族の未曾有の膨脹に樂觀して其の現在及び將來の危険を思はない讀者を戒めにかゝる。人種別世界人口の現状は第二表の如く、

第二表 人種別世界人口(單位百萬)

計	總數	白色					黄色		赤色		褐色		黑色		其他の混血	
		北	中	南	アフリカ	アジ	ヨロ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
計	二、〇三〇	六七八	九九九	一八	二八	二四〇	一六七									
オーストラリア (大洋洲)	一〇	八	一	一	一	二										
南米	八四	三九	〇・二	一一	一	九	二五									
中米	三四	六	一	七	一	三	一八									
北米	一三三	一一九	〇・三	〇・三	一	二	一四									
アフリカ	一四六	四	一	一	二	二	一									
アジ	一、二五	一四	九八八	一	一	一	二									
ヨロ	四九八	四八八	一〇	一	一	一	一									

* この全部は近東に於けるアジア人でモンゴル、アリアン、セム、ハムの雜多な混血人種と考へられる

白色人種は世界總人口の約三分の一を占めてをり、かくの如き比重を獲得せる過去數世紀間の白人激増の數字は確かに未來への杞憂を無用視せしむるも故ありとして、著者はアメリカ著名の統計學者ウィルコックスの興味ある計算結果を引用してゐるが、之によると全世界の人口は

一六五〇年に 四六五(百萬)、その内歐洲は一〇〇(百萬)
一七五〇年々 六九二 〃 〃 一四〇

一八五〇年〃 一一三〇 〃 〃 二六六
 一九二九年〃 一八二〇 〃 〃 四七八

となつてゐて、約三百年近い間に世界人口は約四倍となつたのに對し、白色人口は歐洲内だけで約五倍となつてをり、且つ其間大量の移民を他大陸へ送つてゐて一九二九年現在の全世界白色人口は(同じくウィルコックスに依れば)六四二(百萬)に達する。換言すれば有色人口が三倍化する間に白色人口は六倍以上にも増大せることになる。

(註) Walter F. Willcox, Increase of the Population of the Earth and of Continents. In "International Migrations," Vol. II, New York 1930.

右の如く過去數世紀間白色人種が有色人種に對して持つてゐた此の謂はば生物學的優越こそ、著者によれば、其の政治的經濟的乃至は文化的世界支配の基礎であつたのだが、併し漸く産兒制限といふ民族的自殺病に侵され初めた此の最高文化民族は最早その人口の現状維持にさへ困難を感じる状態に立到つてをり、現在なほ數字の上に現はれてゐる自然増なるものも實は子供や青年の増加に非ずして單に老人の増加に過ぎないことを著者は警告しようとするのである。それだけに多産的なアジアの有色人種が著者の憂患の種となるのも當然で、著者は前掲第一表(b)の中に既に其の増殖速度の逆轉を看取し得ることを注意してゐる。即ち前世紀中、殊に今世紀以降歐洲人口の増加速度は他大陸より遅れてきてをり、一八〇〇—一九三二年間世界人口は三・五倍に増加せるに對し歐洲は二・九倍の増加に過ぎず、世界の白色總人口に於いても其の増加は三倍を僅かに超えるに對し、其の間黄色人種は三・五倍に増大し現在世界總人口の約五分の三を占めるに到つてゐる(第二表参照)。

於是、著者は白色及び有色人種の出産數の比較を試み、資料の缺除を種々の推定を以て補足せる次の如き第三表を掲げてゐるが、

ブルグドエルファー著白色民族は滅亡するか(一)

第三表 白色及び有色諸民族の出産數の推定(一九三二年)

種族	總人口 (單位百萬)	出生數		
		總數	白色	有色
ヨーロッパ (ロシアを除く)	三八二	八、二二七千	八、二二七千	一千
歐露	一一六	四、九〇八	四、四八三	四二五
ヨーロッパ	四九八	一三、一三五	一二、七一〇	四二五
アジア	一、一二五	三六、二〇〇	六〇〇	三五、六〇〇
アフリカ	一四六	五、二〇〇	一〇〇	五、一〇〇
北米	一三三	二、三四〇	二、〇九〇	二五〇
中米	三四	一、五〇〇	二五〇	一、二五〇
南米	八四	二、四〇〇	一、一〇〇	一、三〇〇
オーストラリア (大洋洲)	一〇	二〇〇	一四〇	六〇
計	二、〇三〇	六一、〇〇〇	一七、〇〇〇	四四、〇〇〇

之によつて見ても世界總人口の三分の一を占めてゐる白色人種が其の出産數に於て占めてゐる割合は四分の一に過ぎないことになる。更に其の内の四分の一強はロシアの占める所で、ロシアを白色人種に入れることに異議はないとしても之をヨーロッパといふ政治的觀念の中へ包攝し得るか如何かは多少問題となるだらうと著者はいつてゐる。

三 歐洲に於ける出生減退傾向、特に出生率及出生數の低下に就て

於是、著者は本著の主題たる白色民族の出産減退の事實を各國別に檢證しはじめ。蓋し十九世紀末までは尙フランス特有の現象と思はれてゐる

た出生減退は、二十世紀に入るに及んで多少の程度の差こそあれ全白人文明國に見られる國際的現象となつてをり、獨逸を筆頭として二三の諸國は此の點では既にフランスを追ひ越して了つてさへあるからである。それも醫學の進歩普及が死亡率を漸減させてゐた間は焦眉の問題でもなかつたし、のみならず死亡率の低下は出生率の低下にも拘らず出生超過（自然増加）を漸増させさせたのだが、併しこの種の人口増加に限度があるのは恰も消費の節約だけで永く企業収益の増大を圖らうとするに等しいと著者はいふ。

そこで先づ普通の出生率について調べてみると、一九〇〇年には多くの歐洲諸國は人口千に付三〇乃至四〇の出生數（獨逸は三六）を示してをり、英、瑞、白、スイスでは三〇を僅か割つてはゐたが今日の比ではない。フランスだけが例外で一八〇一年の三二・八を最高として以後漸減し、前世紀末には約二〇の數値を以て世界最下位に立つてゐたのだが、併し現在（一九三三年現在）獨・英・瑞典のゲルマン系諸國と其の位置を替へるに到つたことは前述の如くである。そこで著者は之ら諸國が夫々出生率の最高を示せる年次をとつて之を一九三三年現在と比較し次の如き數字を掲げてゐる。

フランス 人口千に付 三三・八（一八〇一年）より 一七・三へ、即ち 四七・％減

第四表

(a) 世界各國別出生數の増減（單位千）

獨逸(1)	年 平 均 出 生 數				
	一九〇五	一九一〇	一九一五	一九二〇	一九二五
總人口	一、九〇九	一、九二四	一、九二九	一、九三四	一、九三九
獨逸(1)	一、七四八	一、六二八	九六五	一、四〇八	一、二〇一

(b) 同上指數（一九一〇—一九一四平均—一〇〇）

獨逸(1)	一九〇五	一九一〇	一九一五	一九二〇	一九二五
總人口	一〇七	一〇〇	六二	八七	六〇

獨逸 三九・七（一八七三年） 一五・一 六二・％
 瑞典 三六・五（一八二五年） 一四・五 六〇・％
 大ブリテン 三五・九（一八七六年） 一五・八 五六・％
 イタリ 三九・三（一八七六年） 二三・八 三九・％

また出生總數に就て之を見ると獨逸に於ける最高は一九〇一年で、當時の領土内（人口五七（百萬）に二、〇三二（千）の出生數をもつてゐたが、一九三二年には（人口六五（百萬）に對し）僅かに九七八（千）しかない。出生數はこの三十年間に、總人口の増加及び妊孕年齢有配偶女子の著増にも拘らず百萬以上、即ち半分以上も低落したことになる。著者はこの出生總數に於いても次の如き各國別夫々の最高年次との對照を試みてゐる。

獨逸(大戰前領土)	一、〇五四減	即ち五二・％減
獨逸(大戰後領土)	七九二	四四・％
大ブリテン	三七五	三四・％
フランス	三一二	三〇・％
イタリ	一七〇	一四・％

併し其他の歐洲諸國にも同様の傾向の看取し得る事は次の第四表の數字の示す如くで、唯一つ和蘭を除いて中・西・北歐諸國に於いては其の總人口の増加にも拘らず其の出生數は大戰前よりも少くなつてをり、たゞ南歐及び東歐の一部に例外的現象を見るに過ぎない。

第五表 歐洲の出生率及び自然増加率の増減

年次	出生率					自然増加率				
	1913	1927	1930	1931	1932	1913	1927	1930	1931	1932
獨逸	191.3	192.7	193.0	193.1	193.2	191.3	192.7	193.0	193.1	193.2
オーストリア	127.5	184.4	175.5	160.0	155.1	124.4	164.4	165.5	147.7	143.3
瑞西	224.1	177.8	168.8	158.8	152.2	57.7	29.9	33.3	19.9	13.3
リトアニア	233.1	176.6	172.2	167.7	167.7	88.8	52.2	56.6	46.6	45.5
エストニア	233.1	176.6	172.2	167.7	167.7	88.8	52.2	56.6	46.6	45.5
フィンランド	227.2	212.2	206.6	195.5	176.6	11.1	67.7	74.4	62.2	27.7
瑞典	233.2	161.1	154.4	148.8	145.5	95.5	34.4	37.7	23.3	30.0
諸威	255.1	178.8	170.0	167.7	180.0	118.8	66.6	64.4	60.0	69.9
大イギリス及アイルランド	224.2	177.3	169.9	180.0	159.9	99.9	47.7	79.9	66.6	69.9
ペルギ	222.4	183.3	186.6	182.2	176.6	78.8	49.9	54.4	50.0	48.8
フランス	188.8	182.2	180.0	174.4	173.3	1.1	17.7	24.4	1.1	15.5
スペイン	304.4	286.6	290.0	283.3	283.3	83.3	97.7	117.7	105.5	119.9
ポルトガル	332.3	323.3	304.4	304.4	307.7	118.8	123.3	129.9	133.3	132.2
イタリア	317.7	270.0	267.7	249.9	238.8	130.0	112.2	126.6	101.1	92.2
ギリシヤ	293.3	314.4	314.4	309.9	313.3	130.0	127.7	150.0	131.1	131.1
ブルガリア	410.0	332.2	313.3	294.4	313.3	186.6	129.9	152.2	125.5	151.1
ルーマニア	421.1	355.5	350.0	333.3	359.9	160.0	124.4	156.6	125.5	142.2
ハンガリー	333.8	257.7	254.4	233.3	230.0	115.5	80.0	99.9	67.7	52.2
チェコスロバキア	289.9	233.3	227.7	215.5	210.0	96.6	73.3	85.5	71.1	69.9
ポーランド	418.8	319.9	323.3	303.3	287.7	181.1	143.3	167.7	148.8	137.7
ウクライナ	403.3	333.3	333.3	303.3	287.7	223.3	225.5	167.7	148.8	137.7

白 露	三九・〇	三八・六	—	—
歐 露	四九・八	四四・二	—	—

之によると出生率及び自然増加率の低下は殆んど凡ての歐洲諸國に看取せられるものの、前大戰以來ゲルマン系諸國に最も著しく、ラテン系諸國これに繼ぎ、最近はバルカン諸國や波蘭等のスラブ系諸國にも及んでゐる。最近の調査發表のないロシアに就ては其の反家族的立法の影響を見るに由ないが、波蘭の數字から類推しても恐らく同様の傾向を辿り初めてゐるに相違ないと著者は推定してゐる。とはいへ凋落傾向は特に中・西・北歐に重くて邊境地域に軽く、スラブの女は西歐特に獨逸の女に較べると現在なほ略二倍の子供を生むことを著者は注意してゐる。

著者は更に自然増加を其の總數に於ても檢討し乍ら茲でも亦變動の最も激しいのは獨逸であることを忠告する。即ち世紀の變り目頃には出生總數年二百萬、自然増加は毎年八乃至九十萬、人口千に付一五の割合であつたのに、其後の死亡率の著減にも拘らず一九三二年には出生總數は約半減して九十八萬、自然増加は三分の一以下に萎縮して二十八萬、人口千に付四・三の割合となつてゐる。

この自然増加の遞減傾向を各國別に夫々大戰前年との比較に於て見ると次の如くで、

	自 然 増 加			
	人口千に付			
總 數	一九三二年	一九三二年	一九三二年	一九三二年
	七二・二	二八・〇	二二・一	四・三
獨逸 (大戰後領土)	—	—	—	—
大ブリテン	四五・〇	一七・五	九・九	三・六

ブルグドエルファー著白色民族は滅亡するか(一)

瑞 典	一九・七	二四・五	—	—
フ ラ ン ス	一六・三	二一・九	—	—

イ タ リ ー	四五九	三八五	一三・〇	九・二
ス ペ イ ン	一六九	二八二	八・三	一一・九
ポ ー ラ ン ド	—	四四五	—	一三・七
ウ ク ラ イ ナ	四九九	五一八	一八・一	一七・〇*

* 一九二九年の調査

獨逸の凋落は最も著しく、現在は獨逸の半數の人口しかない波蘭やウクライナより更に尠い。伊太利も落調を辿つて率ではスペインとその位置を逆にしたが、このスペインの上昇傾向は同國に於ける最近の衛生施設の普及に負ふものだと著者は見てゐる。自然増加總數に見ても凋落傾向が中・北西歐に著しく南・東歐に輕いのは前と同様で、特に東歐諸國の自然増加率は中・北歐の出生率に匹敵する數値をもつてゐることを著者は重ねて注意してゐる。

ロシアに就いて著者がその部分的資料から推定してゐる所によると、歐露については毎年の自然増加約三百萬、アジア部分では五十萬、計三百五十萬で、この數字は他の全歐諸國の總和より大きい。ロシアに就いても自然増加に遞減傾向ありや否やは不明だが、この大數に對しては如何でもよいことでもあり、且つソ聯邦の反家族的立法もスラブ人の健全な出産力に對しては何の障害ともなつてゐまいと著者は推察してゐる。この點ロシアにも出産減退の傾向あるべしとした著者自身の前の論述と多少の矛盾はあるが、この矛盾は恐らく獨逸人たる著書がスラブ人種に對して抱いてゐる

願望と恐怖との産物と考へるのが至當と思はれる。

著者はこゝで更にこの『ソ聯邦の好敵手、極東の日本』、著者によれば西洋文明を取り入れ乍ら出産減退といふ没落の現象だけは少くとも今迄のところ眞似てゐない我が國を拉し來つて之を未來の黄色人種或は有色人種一般の代表者となし、日本と略同人口をもつ獨逸と比較對照して、有色及び白色人種の増殖傾向の相違を一目瞭然たらしむる好資料として掲げてゐる。

	一九一三年	一九三二年	
自然増加數	人口千に付	自然増加	人口千に付
獨逸	七二・一	二八・〇	四・三
日本(内地)	七三・〇	一三・八	一五・二

之によると兩國は大戦前年には略、同じ自然増加を示してゐたのに、現在の日本は獨逸の三倍以上となつて獨逸の總出生數よりも大きいことになつてゐる。尤も本著出版以後、ナチス政權下の獨逸は其の人口現象に顯著な回復傾向をみせてをり、一九三八年には出生率一九・七、自然増加率八・〇となつてゐるのに對し、日本は事變の影響をも入れて出生率二六・七、自然増加率九・二六と激減してゐることを附記してをく。

五 自然増加の假面を剥いだ白色諸民族の眞の生命力

ところが著者は中・北・西歐諸國に見るこの貧しい自然増加をさへ實は一つの錯覺的現象に過ぎないものだとして、實際には之ら諸國は現在の人口數を單に維持するにさへも困難な状態に立到つてゐるものであることを讀

者に向つて忠告しはじめ。蓋しその様な錯覺の起るのは各人口に固有な年齢構成といふものが問題となるからで、人口千に對する出生、死亡及び自然増加の率を求めるといふ普通のやり方は人口の眞の動態的狀況を捉へようとする以上、各人口の年齢別及性別の構成が一定してゐる場合の外は正當でないと思はれる。特に大戦後の中・北・西歐諸國に見る様に少年層の少く中年層の比較的が多い所では普通の計算法によるものは其の實際の人口動態的狀況よりも遙かに好都合な數値をとつて現はれることになるからである。

そこで著者は眞の出生率又は死亡率は年齢構成に於けるこの種の異常性の取り除かれた正常化されたる年齢構成に對して算出されねばならぬとして、著書自身が嘗て獨逸に就て計算せる方法(註)に従ひ次の如き各國の出生及び死亡の眞正率を算出してゐる。

(註) F. Burgdorfer, Der Geburtenrückgang u. seine Bekämpfung, Die Lebensfrage des Deutschen Volkes 1929 及び Derselbe, Volk ohne Jugend 3 Aufl. 1928. 參照

(筆者補註)ブルグドネルファーの技にいふ正常化されたる年齢構成 *genormter Altersaufbau* とは、現在人口總數を現在のまゝに止め、之を毎年一定の出生人口が現在通りの性別各歳別死亡率に隨つて各年齢層に配分せられたる状態に變形せる場合に現はれる年齢構成をいふ。言ひ換へれば現在とその總數及び性別各歳別死亡率を等しくする靜止人口 *stationäre Bevölkerung* の年齢構成をいふことになるわけで、簡單に靜止年齢構成 *stationärer Altersaufbau* とよばれてゐる。(なほ右の靜止人口とは、年齢別出生率及死亡率が一定し従つて自然増加率及年齢構成も一定するロトカの所謂安定人口 *stabile Bevölkerung* に於て自然増加率の零となる特殊場合に相當することになる。)

眞の死亡率 *berichtigte Sterbeziffer* とは現在人口が右の如き靜止年齢構成をつたとする場合に現はれてくる死亡率のことで、つまり現在の平均壽命を以て千

を割つた數値をいふことになる。一九二四—二六年の獨逸の平均壽命は五七・四歳で、 $1000 \div 57.4 = 17.4$ が眞の死亡率となる(第六表に一七・二とあるは前大戰の影響及一九二八年の乳幼児死亡率の低下を加算せるによる)。右は一九二七年の死亡率一七・二を遙かに超えた數値となるが、若し死亡率(人口千に付)一七・二を以て一九二七年の平均壽命を逆算すると平均壽命八三歳といふ實際上考へ得べからざ

る數値となることになる。
眞の出生率 *hereinigte Geburtenziffer* とは現在人口が右同様の靜止年齢構成をとつた場合に現はれる出生率のこと、この場合の妊娠年齢(一五—四五歳)女子の出生率が現在と同じものとして其の出生總數を總人口に對する千分比として表はせる數値をいふ。

第六表 歐洲諸國の眞の死亡率、出生率、竝に自然増加率

國	生命表	眞の出生率(1)		眞の自然増加率		粗自然増加率				
		一九二六—七	一九二九—三〇	一九二六—七	一九二九—三〇	一九二六—七	一九二九—三〇			
獨逸	一九二四—二六(2)	一七・二	一五・九	一四・九	(-)	一・三	(-)	二・三	七・二	五・九
スウェーデン	(3)	一六・五	一四・七	一四・二	(-)	一・八	(-)	二・三	五・八	五・一
瑞典	(4)	一六・六	一四・九	一三・七(II)	(-)	一・七	(-)	二・九(II)	四・三	三・六(II)
諸威	(5)	一六・四	一七・〇	一五・二	(+)	〇・六	(-)	一・二	七・八	六・七
丁抹	一九二二—二五(6)	一六・三	一七・一	一五・九(II)	(+)	〇・八	(-)	〇・四(II)	八・八	八・一(II)
イングランド及ウェールズ	一九二〇—二二(7)	一七・一	一四・六	一三・九	(-)	二・五	(-)	三・二	五・三	三・九
アイルランド自由國	一九二五—二七	一七・三	二〇・九	一八・二(II)	(+)	三・六	(+)	〇・九(II)	六・〇	五・六(II)
和蘭	(8)	一五・八	二一・〇	二〇・一	(+)	五・二	(+)	四・三	一三・四	一三・一
フランス	一九二〇—二三(9)	一八・四	一八・四	一八・〇	(±)	〇・〇	(-)	〇・四	一・五	一・一
イタリー	一九二〇—二二(10)	一九・八	二四・九	二四・二	(+)	五・一	(+)	四・四	一〇・八	一〇・八
ウクライナ	一九二五—二六	二二・二	三五・一	二九・九(II)	(+)	一二・九	(+)	七・七(II)	二三・三	一九・二(II)
波蘭	一九二二	二〇・四	二八・八	二七・六	(+)	八・四	(+)	七・二	一四・七	一六・三

(1)獨逸、フランス、イタリーに對しては前大戰の影響による女子妊娠力の一時的停止を調整 (2)一九二八年の低位の乳幼児死亡率を顧慮 (3)一九二四—二六年獨逸の生命表を代用、乳幼児死亡率のみは一九二八年スイスの乳幼児死亡率を使用 (4)一九二四—二六年獨逸の生命表を代用、乳幼児死亡率のみは一九二八年諸威の乳幼児死亡率を使用 (5)一九二四—二六年獨逸の生命表を代用、乳幼児死亡率のみは一九二八年瑞典の乳幼児死亡率を使用 (6)一九二八—二九年の低位の乳幼児死亡率を顧慮 (7)註(6)に同じ (8)一九二二—二五年の丁抹の生命表を代用、乳幼児死亡率のみは一九二八年和蘭の乳幼児死亡率を使用 (9)註(6)に同じ (10)註(6)に同じ (11)一九二八—二九年度

普通の粗算な計算法によると右の各國の自然増加は皆一様に相當の出生 超過となつてゐるが、之を正常化されたる年齢構成の場合に換算すると右

十二ヶ國中七ヶ國までは出産不足を告げてくる。不足の一番輕いのは不思議にもフランスで、その理由はフランスの年齢構成が静止状態の其れに近似してゐるが爲であるが、併しこのフランスに就てさへ僅かの出生超過の錯覺は見出される。獨逸に到つては二・三の不足で、この數値は一九三二年には更に五になつてゐると著者はいふ。要之、本著者の計算によれば、和蘭を除いて中・北歐のゲルマン系諸國の生物學的・生命力は一律に出生不足を告げてゐるわけで、その真相は別掲の圖表に一目瞭然としてゐる。

更に著者は前表第二段の眞の死亡率を以て各國が其の人口現在數を單に維持するだけの爲に必要な要出生率と考へ得るとして、獨逸の實際の出生數は一九二九—三〇年に七分の一（一九三二年には三分の一も）足りないことを注意してゐる。一般にゲルマン系諸國では（和蘭を除いて）現在の子孫はその數に於いて父母の世代に取り替るに足りないわけで、反之、スラブ系諸國に在つては逆に三五乃至五〇%の増加をみるこゝとなる。

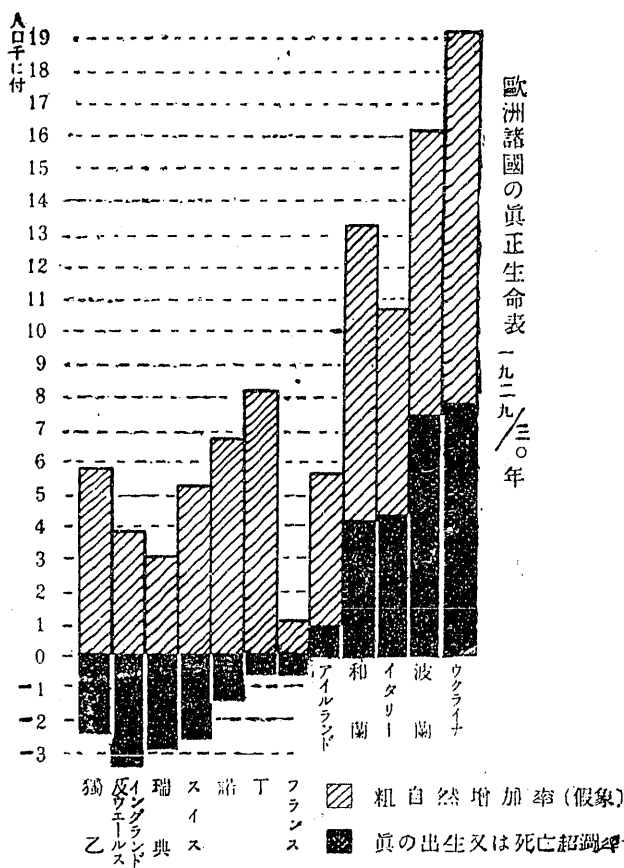
著者は更に著者とは別途の方法によつてクチンスキーの算定せる各國別の再生産率を引用して自説の傍證としてゐるが、之によると現状維持の場合の再生産率は1で、人口の増減傾向は之を上下する大小の數値をとつて表はされることになる。一九二六年に對するクチンスキーの算定によると北・西歐諸國は芬蘭と丁抹

の二國を除いて悉く一以下となつてゐる。

瑞 典	〇・九五	チエツコ、	一・以上
フ ラ ン ス	〇・九四	スロバキア	一・一三
レ ト ア ニ ア	〇・九〇	ハンガリー	一・二九
獨 逸	〇・八九	ブルガリア	一・三二
イ ン グ ラ ン ド	〇・八八	イ タ リ ー	一・四〇
澳 太 利	〇・八〇	ウ ク ラ イ ナ	一・四〇
エ ス ト ニ ア	〇・七八	ソ 聯 邦	一・七〇
芬 蘭	一・〇九	露	一・七〇
丁 抹 乙	一・〇九七		

なほ全西・北歐の再生産率は〇・九三で、既に一九二六年に七%の不足があるわけだが、著者は一九三二年現在では西・中・北歐の全平均で少くとも一五乃至二〇%の不足があり、特に獨逸では不足三〇%とし、ゲルマン系諸國民が人口學上危局的なる萎縮衰亡の段階にあることを忠告してゐる。

尙、歐洲以外の諸國に就ては著者は其の資料難の故に單に其の出生及び死亡の粗率を掲げて其の概勢を大觀させてゐるが、



第七表 歐洲外諸國の人口動態

	出生率			死亡率			自然増加率		
	一九三三	一九三二	一九三一	一九三三	一九三二	一九三一	一九三三	一九三二	一九三一
日本	三三・二	三五・一	三三・二	一九・四	二二・七	一九・〇	一三・八	一二・四	一三・二
英領印度	三九・四	三三・二	三四・四	二八・七	三〇・六	二四・九	一〇・七	一・六	九・五
フィリッピン	三四・五	三三・三	三五・五(1)	一六・八	一八・八	一八・三(1)	一七・七	一四・五	一七・二(1)
エヂプト	四三・六	四二・二	四三・三	二六・六	二五・三	二五・九	一七・〇	一六・九	一七・四
南阿聯邦(3)	三一・七	二八・四	二五・五	一〇・三	一〇・四	九五	二二・四	一八・〇	一六・一
北米合衆國(4)	—	二四・三	一七・八	—	一一・七	一一・一	—	一二・六	六・七
カナダ	二九・一	二九・四	二二・四(2)	一一・三	一一・五	九・九(2)	一五・五	一七・九	一二・五(2)
アルゼンチン	三八・〇	三二・八	二八・六	一六・三	一五・八	一二・四	二一・七	一七・〇	一六・二
チリ	四〇・八	三九・〇	三四・二(2)	三一・一	三三・七	二二・八(2)	九・七	六・三	一一・四(2)
濠洲聯邦	二八・二	二五・〇	一六・九(2)	一〇・八	九・九	八・七(2)	一七・五	一五・一	八・二(2)

(註) (1)一九二八年 (2)一九三二年 (3)白色人口のみ (4)國勢調査區域のみ

こゝでも著者の特に注視するのは歐洲外諸國中の白色人口で、その出生力は既に現状維持の状態に迫り、或は既に之を割つてゐることである。即ち著者はロトカが北米合衆國の白色人口に就て所謂「安定」年齢構成を基として算出せる一九二〇——二二二二間に對する眞の自然増加率人口千に付五・四七の數値を引用し、この數値は其後の粗自然増加率の推移より見て現在すでに零に、即ち單なる現状維持の状態に迫つてゐるに相違ないと推定してゐる。要之、著者によればゲルマン系諸民族の人口學上の危局的段階は單に歐洲に止まらず既に全世界に及んでゐることになる。(續)

國勢調査間年次に於ける普通世帯人口及普通世帯數の推計

縮 田 嘉 彰
窪 田 嘉 彰

本誌第一卷第二號及第三號(昭和一五年五月及六月)に「國勢調査間年次に於ける男女年齢別人口の推計」を掲げ、生存率を適用することによつて